



# リンクする SDGs と自治体の取り組み ～愛媛県内子町での取り組み事例から～

内子町総務課政策調整班長 山岡 敦

2015年9月25日、ニューヨークの国連総会特別サミットで「持続可能な開発目標（以下、SDGs）」を含む「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択されました。

「SDGs」は、先進国も対象となる「普遍的目標」として、今後国際・国内・地方の各レベルにおける実施を進めることが重要で、日本でも中央政府レベルの実施体制の構築と共に、広く国内への普及や、地方自治体レベルの関与が必要とされています。このことを受け、愛媛県内子町では、11月21日（土）、国連生物多様性の10年市民ネットワーク、「動く→動かす」、アフリカ日本協議会、環境省四国環境パートナーシップオフィス、内子町の共催、外務省、愛媛県、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの後援により、フォーラム「ローカルSDGs? in 内子町」を内子自治センターで開催しました。会場には、内子町民をはじめ、町や周辺自治体職員、研究者、NPO/NGO関係者など、SDGsの国内実施に関心のある方約40人が集いました。

人口1万8千人弱の小さな町・内子町での今回のフォーラムでは、「SDGs」の概要や、「SDGs」が地方にもたらす意義、また着地型観光やエコロジータウン構想など、内子町のまちづくりと「SDGs」についてそれぞれ報告され、四国各地からの報告も交えながら、これから日本が、そして内子町のような地方の自治体に取り組むべき課題や方向性について議論を深めました。

内子町は、2005年1月、旧内子町、旧五十崎町、旧小田町が合併し誕生した町です。新町の総合計画では、「町並み、村並み、山並みが美しい、持続的に発展するまち」を町の将来像に据え、少子高齢化による人口の急減や農林業の衰退など、深刻な課題を抱えつつも、時代の変化に柔軟に対応しながら、いつまでも住み続けられる内子町を目指し各種施策に精力的に取り組んでいます。ここで改めて「SDGs」の17の目標について、内

子町での取り組みと照らし合わせてみました。

内子町では、「地域の歴史や伝統文化を大事にし、まちに誇りをもって暮らすことができるまちづくり」が原点です。1975年頃より始まった、木蠟生産で栄えた古い町並み保存運動が功を奏し、1982年に、八日市護国の町並みが四国で初めて、全国で18番目に国の重要な建造物保存地区に指定されたことにより、その取り組みが、やがては村並み保存にまで裾野を広げるなど、将来にわたって持続可能なまちと地域社会の形成（SDGs目標11）、雇用創出、地方の文化振興・産品販促につながる持続可能な観光業の促進（SDGs目標8）へと歩みを進めています。

町並み保存運動は、さまざまな副産物を生み出しました。その一つが、国際交流です。1986年、当時のドイツ・ローテンブルク市長を招聘し、内子座で開催した「内子シンポジウム86」により同市との交流が芽生え、それが2011年の姉妹都市盟約として実を結び、現在もなお市民・町民レベルでの交流が続いています。この取り組みは、持続可能なライフスタイル、人権、男女平等、グローバル・シチズンシップ、文化多様性と持続可





能な開発への文化の貢献の理解のための教育（SDGs 目標 4）へと深い関わりをもつものです。特に、青少年の海外派遣事業に参加した多くの学生たちが、これからの世界に貢献できる人材へと成長してくれることを期待しています。

内子町では、住民と行政が協働する仕組みとして内子町独自の自治会制度を導入しています。41 の自治会全てにおいて、10 年先の未来を描く「地域づくり計画書」を策定し、それが町の総合計画の基礎ともなっています。すなわち、町の意味決定には、かならず町民の意思が加わっており、持続可能なまちと地域社会の実現（SDGs 目標 11）、平和で公正な社会と有効な制度（SDGs 目標 16）に合致するものであります。

高次元農業にも内子町は取り組んできました。その成果が、2015 年 1 月に国交省の全国モデル道の駅に認定された「うちこフレッシュパークからり」です。農産物直売所をはじめとして、レストラン、パン・ソーセージ工房などを併せ持つこの複合施設は、16 年間で利用者は 6 倍、販売額は 8 倍となり、町の農産物生産額の 15 % を占めるまでに至り、約 60 人の新たな雇用を創出しました。これはまさしくディーセントワークと経済成長（SDGs 目標 8）であり、持続可能な産業化とイノベーションの促進（SDGs 目標 9）であります。また、女性出荷者を中心にここまで発展を遂げた経緯は、ジェンダーの平等、すべての女性の能力強化（SDGs 目標 5）に大きく貢献しています。

豊富な森林資源を活用した木質ペレットの普及など、再生可能エネルギーの活用（SDGs 目標 7）にも取り組



んでいます。内子町では、旧内子町時代からエコロジータウン・内子をまちづくりのキャッチフレーズに掲げ、自然にやさしい、生活にやさしい独自の環境政策を行ってきました。現在も、環境自治体会議に参加するなど、全国でも先進的な取り組みを行っています。

こうして改めて考えてみると、内子町が目指すまちづくりの先には、SDGs が掲げる目標がしっかりとあるように思えます。内子町のような小さな地方自治体の取り組みが、今後どのような意義を持つのかはわかりませんが、地域の活性化や住民参加の促進、生物多様性の維持、持続可能な環境や暮らしは SDGs の目標達成にも強く関わってくる課題であり、内子町の取り組みが、地方から国、そして世界を動かす小さな一歩になるかもしれません。



SDGs については、クリアフォーラム vol. 314, 315 の国際協力情報にも掲載しておりますので、併せて、ご一読ください。

1月号の現場レポート（p.19）において、次のとおり誤りがありました。以下のとおり訂正し、お詫びいたします。

記事の冒頭  
誤 平成 25 年 6 月 16 日  
正 平成 27 年 6 月 16 日